

今週の為替相場見通し(2021年12月6日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		112.54 ~ 113.96	112.86	112.00 ~ 114.00
ユーロ	(ドル)		1.1235 ~ 1.1387	1.1311	1.1200 ~ 1.1450
(1ユーロ=)	(円)		127.39 ~ 128.75	127.63	126.50 ~ 129.00
英ポンド	(ドル)		1.3195 ~ 1.3371	1.3232	1.3100 ~ 1.3300
(1英ポンド=)	(円)	*	148.98 ~ 151.93	149.25	148.00 ~ 150.50
豪ドル	(ドル)		0.6994 ~ 0.7172	0.7001	0.6880 ~ 0.7100
(1豪ドル=)	(円)	*	78.79 ~ 81.48	78.95	77.80 ~ 80.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

(1) 今週の予想レンジ: 112.00 ~ 114.00 円

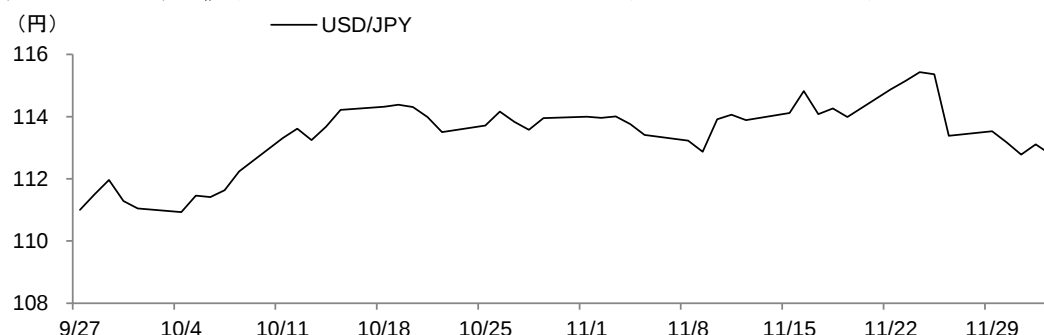
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は上値の重い展開となった。週初29日に113.75円付近でオープンしたものの先週末からのリスク回避のドル売りの流れが継続、一時113円を割り込むも株式市場が持ち直し、米金利上昇や米10月住宅販売保留件数の力強い結果に週高値の113.96円まで反発した。30日は113円台後半での小動きだったが、オミクロン株の感染拡大懸念からリスク回避の動きが強まり、米11月コンファレンスボード消費者信頼感指数も市場予想を下回ったことを受け、10月前半以来の水準となる一時週安値の112.54円まで下落。その後パウエルFRB議長がテーバリング加速について言及したことで113円台後半まで回復も、結局113円台前半まで押し戻された。1日、前日のパウエル議長のタカ派的な発言を受けドル買いが継続し、113円台半ばを堅調に推移。海外時間に再びリスク回避の動きが強まり、112円台後半まで値を下げた。2日には株式市場の持ち直しや米長期金利の上昇を受け、113円台半ばまで上昇。その後もFRB関係者のタカ派的な発言に113円台を維持した。3日は日中には113円を挟んだ推移となったが、米11月雇用統計にて非農業部門雇用者数が前月比21.0万人増と予想の55.0万人増を下回り、かつ、平均時給も前月比0.3%上昇と予想の0.4%上昇を下回ると113.00円まで下落。その後、113円台半ばまで値を戻すもオミクロン株への懸念が高まる中で米株が下落すると112.56円まで値を下げた。

今週は113円台を挟んでのレンジ推移となるか。新型コロナウイルス関連ではオミクロン株の感染拡大懸念を背景に115円台半ばまで上昇していたドル/円も112円台半ばまで下落を見せた。現在もその懸念は続いており大きく上値を伸ばしていくような動きは想定し難い。一方で、FRBはテーバリングの加速も検討する局面にある。先日の議会証言でパウエルFRB議長がインフレ高進が一過性でない可能性やテーバリングの早期終了を見据えることに言及。また、2022年の利上げ期待は維持されている中では大きくドル売りがなされる可能性も低く下値を支える材料となるだろう。経済指標では10日(金)に米11月CPIの公表が予定されている。先日の議会証言でパウエルFRB議長が「インフレ加速に対し一過性という言葉を使わないようにする良いタイミングが来た」との見解を示した中でどのような結果となるか注目される。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/29~12/3)の値動き: 安値 112.54 円 高値 113.96 円 終値 112.86 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 1.1200 ~ 1.1450 126.50 ~ 129.00 円

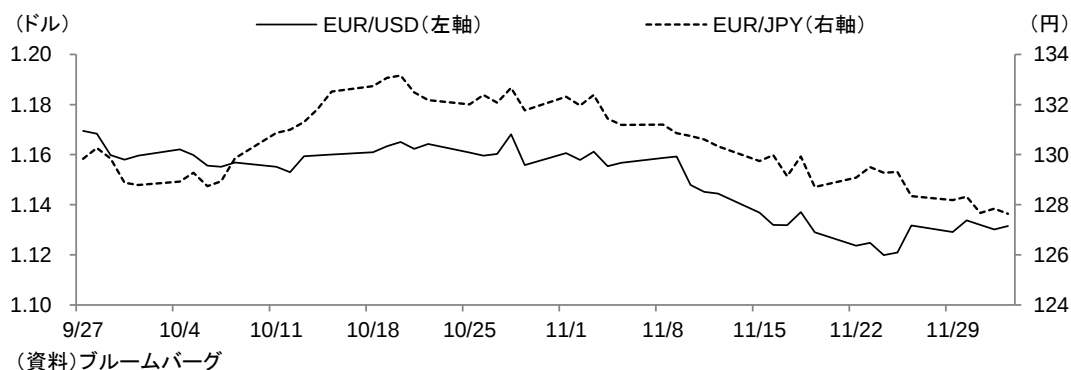
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は方向感に欠け1.1300を挟んだレンジ展開。週初29日、1.1291でオープンしたユーロ/ドルは米長期金利の上昇や米経済指標の良好さを受けてドル買いが強まる中で1.12半ばまで下落し、ユーロ/円も一時127.50円まで下落するも、ユーロ売り一巡後は1.12後半まで戻す動き。30日はユーロ圏11月消費者物価指数(速報値)が前年比+4.9%と25年前の統計開始以来最も高い伸び率となったこと、また反面冴えない米経済指標に一時週高値1.1387まで上昇する場面があるも、その後のパウエルFRB議長のタカ派発言を受けてドル買いが戻り、月末ロンドンフィクシングに絡むドル買いも合わせユーロ/ドルは再び1.1235まで急落。他方ユーロ/円は反応に乏しく128円を挟みレンジ推移。翌1日は特段の材料に欠ける中1.13台までじり高となるも月初ドル買いのフローも相応であり、総じて1.13台前半で方向感に乏しい内容。2日は一時1.13台半ばまで上昇する場面があるも、相次ぐFed高官のタカ派寄り発言、オミクロン変異株の欧州圏内における感染拡大懸念からユーロ売りに押され1.12台後半へ沈む展開となり、ユーロ/円も127円後半で上値重く推移。3日は米11月雇用統計発表後のドルの荒い値動きを受けユーロ/ドルは1.1300を挟み乱高下するも米金利の低下を横目に引けにかけてドルが売られる動きに結局1.13台まで戻し1.1311での越週。ユーロ/円は一時127.39円と週安値を更新し127.63円での越週となった。

今週のユーロは上値の重い展開を予想。オミクロン変異株含め欧州圏でのコロナ感染再拡大を受けた経済下振れリスク、およびECB金融政策スタンスのハト派傾倒観測が引き続きユーロ相場の重しとなろう。ECBの金融政策を巡っては、来週16日(木)の会合において来年3月に終了期限を迎えるPEPP(パンデミック緊急購入プログラム)についての終了判断が協議される予定だが、足元コロナ感染の再拡大を受け終了判断を2月に先送りすることを一部の当局者が検討中との報道や他枠組みでの量的緩和継続観測などを背景として金融緩和の早期縮小期待が後退する状況となっている。実際、オーストリア、ドイツをはじめフランスなどでもコロナ感染が再拡大(オーストリアはロックダウン、ドイツではコロナによる死者が本年2月18日以降で最多を記録)し独仏長期金利も約3か月ぶり水準まで低下する動きとなっている。また物価については、30日(火)に発表されたユーロ圏11月消費者物価指数(速報)が強い数字となりインフレ懸念が強まる場面があった一方で、ECBメンバーのフィンランド連銀総裁は「たとえ一部の要因が従来想定以上長引く可能性があるとしても大半のものが一過性」と発言し、先週「インフレが一時的ではない可能性」を示唆したパウエル議長率いるFRBとのスタンス乖離を窺わせた。今週は欧州圏での主だった経済指標の予定は少ないものの、上述の通り、オミクロン変異株をはじめとしたコロナ再拡大によるクリスマスシーズン前のロックダウンや行動規制によって消費者心理の悪化、経済回復ペースの鈍化、ECBの緩和的な金融政策の持続観測をベースにユーロは重い展開を想定しておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/29~12/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.1235 高値 1.1387 終値 1.1311
(対円) 安値 127.39 高値 128.75 終値 127.63



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3100 ~ 1.3300 148.00 ~ 150.50 円

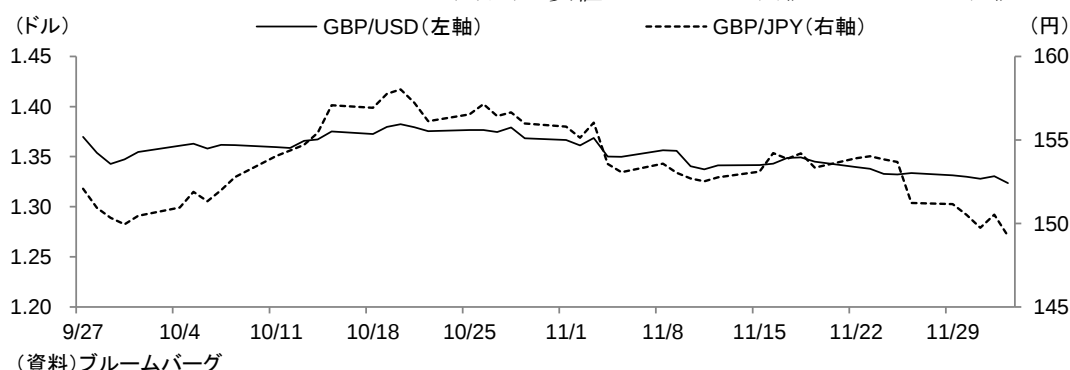
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、押し並べて値幅は限定的だったものの、ドル、円、ユーロなどの主要通貨に対し全面安。この間、主要通貨を大きく動かした要因に、各国の物価動向、金融政策動向があった。30日に発表されたユーロ圏11月CPI速報値は10月確報値前年比+4.1%、市場予想中央値同+4.5%から発表は同+4.9%と大きく上振れ。ユーロは全面高に反応した。そこにカウンターで決まったのは、同日の米連銀パウエル議長発言。同議長は資産購入策の段階的縮小(テーパリング)を加速させる可能性を示唆。テーパリング早期終了の可能性は、利上げ開始の前倒し観測に直結し、ドル全面急騰につながったというわけだ。ユーロ圏の物価上振れを見て、ポンドは、まず、対ユーロで下押し。対ドルでは、この段階で、ユーロに連れてむしろ上昇したものの、上述パウエル議長発言を経て急反落。ほどなく反発したものの、水準を若干切り下げた。逆に、3日に発表された米11月雇用統計が、市場予想を明確に下回ったことは、米連銀金融引締め観測の後退という読みで、ドル全面急落を招いたが、何故か、この局面のドル売りも長続きはしなかった。もうひとつ、この間、金融市場全般を大きく支配したのは、南アで確認された新型コロナの新変異種(オミクロン株)に対する不透明感。世界景気減速に対する警戒感やリスク回避の株安や円高などにつながり、ポンドも、この間、軟調推移を支配的とした。ポンド固有の要因では、英政局の先行き不透明感(後述)が、或いはポンドの値動きを重くした可能性も考えられたものの、「ここぞ」という明確な反応は読み取ることができなかった。

今週の英ポンド相場は、方向感に乏しい軟調推移の継続を予想。上述、30日(火)のパウエル議長発言や、3日(金)の米11月雇用統計を受けた乱高下は、米金融引締め(利上げ開始時期)に対する市場の反応が、従来との比較で若干異質なものに変わりつつある可能性を感じさせた。直後のドル急騰、ドル急落までは納得がいくものの、それぞれほどなく急反転、後者などは、振り返ってむしろドル高に落ち着いてしまったからだ。その意味するところは現時点で見極めがつかないものの、ひとつの仮説として、市場は既に、22年央までの利上げ開始、22年中の複数回の利上げなどを確信してしまっているのではないかということだ。パウエル議長や米連銀理事・地区連銀総裁の発言や単月の経済指標が、もはやその確信を揺るがすような展開は、そうやすやすと起きないのではないか。一方で、足元全般的な円高基調は、仮にオミクロン株自体の影響が軽微であったとしても、次に何が出てくるかわからないという、もっと大きな不透明感の存在を示しているようにも思える。ス様にもやもやした環境で、敢えてポンド軟調を中心にみるのは、やはり、英政局に関する先行き不透明感が拭えないから。ここもと失策が相次ぐジョンソン首相に対する世論の目は一層冷たく、今般は、30日に発覚した「クリスマスパーティ」事件が世間の耳目を集めた。昨年12月、国全体にロックダウンが導入され、パーティも自粛を強要された真っ最中に、首相官邸で、40人規模のクリスマスパーティーが開催されていたというもの。ジョンソン首相は「ロックダウンのルールは全て遵守されていた」と申し開きしたものの、パーティが開催されたこと自体は否定できず、野党/世論の厳しい追及にあった。2日(木)に投票されたロンドン郊外における補選(現職議員の死去に伴う)では、与党保守党が議席は維持したものの、前回(19年)総選挙からは得票率を大きく落としており、ジョンソン政権に対する世論の厳しい評価が反映された結果と受け止められた。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/29~12/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.3195 高値 1.3371 終値 1.3232
(対円) 安値 148.98 高値 151.93 終値 149.25



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1) 今週の予想レンジ: 0.6880 ~ 0.7100 77.80 ~ 80.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は軟調に推移し、年初来安値を更新。週初29日は0.7140近辺からオープン。南アフリカで発生したオミクロン株感染拡大懸念やそれによる豪州への入国規制緩和を2週間延期することによって一時0.7115近辺まで下げたものの、原油価格や鉄鉱石価格が戻したことに支えられて0.71半ば近辺まで戻す。30日は米バイオテクノロジー企業CEOがオミクロン株へのワクチンの効果が限定的との見解を示したことでリスクオフが再び加速。その後徐々に値を戻すも、パウエルFRB議長が議会証言にて次回の政策会合でテーパリングの加速を検討すべきと言及したことで0.7063まで一気に下落。ただし長期金利が伸び悩んだことで0.71前半まで戻した。1日は発表された豪7~9月期GDPが事前予想を上回り(▲1.9%)、週高値の0.7172まで上昇。しかし海外時間にはリスクオフの動きが強まり、米株の下落から再度豪ドルも0.71前半に戻す。2日はOPEC+が来月の増産計画を維持したことで原油価格は一時大きく下落するも調整の余地を残したことが意識されると上昇に転じる。豪ドルは米11月雇用統計を前に狭いレンジでの推移に終始。3日はオミクロン株感染を意識したリスクオフの流れから軟調に推移。発表された米11月雇用統計は前月から伸びが鈍化したものの失業率が大幅低下、労働参加率が上昇と好調な結果に一時豪ドル買いが進むも、金融緩和解除ペース加速が懸念されたことで一転、リスク回避が進行し、0.7000を割り込み年初来安値の0.6994まで下落し、0.70ちょうど近辺で越週。

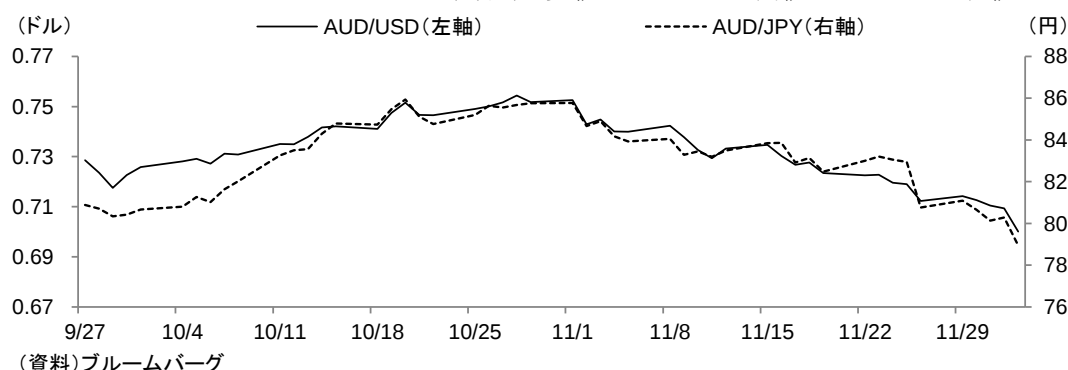
今週の豪ドル相場は引き続き軟調推移となることを見込む。オミクロン株の新規感染者が続々と世界各国で確認され、不透明感の強い状態の中FRBを筆頭として金融緩和の解除が進もうとしているため、リスク資産からの資金流出が続いている状態となっている。そのような状況下で7日に豪準備銀行理事会が行われることから、その動向に注目が集まる。政策金利の0.1%は据え置きが予想されているが、現状では少なくとも2月半ばまで週40億豪ドルのペースで継続するとされている債券購入プログラムの方針に変化があるか注目される。足元の経済指標が好調であることから、購入の早期終了となることも考えられるが、オミクロン株の感染拡大が進む中で金融引き締めが進むことには警戒感も強くなっており、豪ドル相場は上値の重い推移となることを予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/29~12/3)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6994 高値 0.7172 終値 0.7001

(対円) 安値 78.79 高値 81.48 終値 78.95



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償のみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。